



## ベトナムの「麺類」

大塚 直樹

(立教大学大学院 文学研究科地理学専攻)

先日、テレビのコマーシャルを見ていたら、「ベトナムの麺」としてフォーのインスタント食品が紹介されていた。また、スーパーマーケットで、乾燥させたブン（ベトナムの「麺類」の一つ）が「ベトナム特産フォー」という商品名で売られているのを見かけた。後者の例は、単純な間違いかもしれないが、日本では、ベトナムの麺＝フォーというイメージが定着しているようである。

しかし一口に「ベトナムの麺類」といっても、その種類、料理方法は多様である。例えば、私がカントー（ベトナム南部の一都市）で実際に食したものを列挙してみると、先のフォー、ブンの他にフーティウ、パンカン（いずれも原料は米粉）、ミン（原料は緑豆やタピオカ）、ミー（原料は小麦粉）などがある。ただし、フォーやブンなどは、食材の名称であり、料理名ではない。料理名の場合、食材名の後に調理方法を表すベトナム語が付くのが一般的である。これらの食材は、主として汁麺、汁なし麺、炒め麺として調理される。さらにブンは、鍋料理と一緒に食べたり、生春巻きなどの具材として使われたりする。

約2年間のカントー滞在中に、麺類を意味するベトナム語を耳する機会はなかった。ベトナム語には、日本語で用いられる麺類に類似する単語がないのかもしれない。フォー、ブンなどは、麺類と総称しないで、それぞれ別個の民俗分類として考えるべきなのであろう。これは単に食材や料理の名称に限定される問題ではない。グローバル化といわれる現代社会において、ベトナムの人々の日常生活に目を向けるとき、非現地人である私たちが、ローカルな空間の多様性をどのように表現するか、その方法が問われているといえよう。

蛇足ではあるが、ベトナムで食べた料理は、どれもみなおいしかった。ベトナムを訪問する機会に恵まれた人は、「フォー」だけでなく、さまざまな料理を食べて欲しいと思う。日本の日常ではあまり味わえない食材や料理に出会えるはずである。ただ、化学調味料を使いすぎる傾向にはやや閉口するが...

注記：ベトナム語のカタカナ表記は、南部方言に準じた。

## 所長交代のごあいさつ

所長 須永 徳武

立教大学アジア地域研究所は、アジア諸地域の社会・経済研究の推進を目的として、1958年に発足したアジア地域総合研究施設を端緒とします。これ以降、現在まで立教大学のアジア地域研究の拠点として活動を展開してきました。大学の研究所機構の再編・強化にともない1998年にはアジア地域総合研究施設からアジア地域研究所に生まれ変わりました。

このアジア地域研究所の設置に尽力された小西正捷初代所長、多彩な研究プロジェクトを展開し、研究所の共同研究体制の確立を図った梅原弘光前所長、このお二人の後を引き継ぎ、本年4月から私が過分な職責を担うことになりました。研究所の基礎固めにご活躍されたお二人の先輩所長に感謝申し上げますと共に、その基盤をより盤石にするために若輩ながら微力を尽くしてまいりたいと思います。

本研究所は、アジア、アフリカ、オセアニアの各地域を対象として、政治、経済、社会、文化、歴史等の様々な視角から、エリア・スタディーを行ってきました。1999年度からは文部科学省の学術フロンティア助成研究プロジェクト「グローバル化するアジアにおける包括的安全保障と異文化理解」を、アジア研究・学術フロンティア本部（五十嵐暁郎事務局長）と共同して進めております。その一環として国際ワークショップを開催するなど、国内外の様々な分野における研究者ネットワークの拠点としての役割も果たしてまいりました。その他、プロジェクト研究や一般公開による講演会、公演・講演会、研究会、シンポジウムの開催を行い、そうした活動のプロシー

ディング、オケージョナルペーパー、ワーキングペーパーなどの発行も行っております。

本研究所は、現在12名の所員と学内外の研究者に委嘱する研究員、大学院生等の若手研究者に委嘱する準研究員により構成されています。また、事務スタッフのアルバイトおよびリサーチ・アシスタント各1名により研究所の日常業務が処理されております。

本研究所の発展にとって最大の課題は研究所予算の拡充にあると思います。これまで本研究所がそれなりの活動を展開し得たのは、アジア研究・学術フロンティア本部から研究資金をはじめとして様々な援助を与えられた結果です。本研究所は立教大学の総合研究センターの下にありますが、ここを經由して割り当てられる大学からの予算額は研究所の事務業務の遂行にも不十分な額にすぎません。大学の研究水準の評価として国際的な研究拠点の形成などが求められる時代です。本学には所属を問わず優れた研究業績と国内外に多彩な研究者ネットワークを有するアジア地域研究者が多数在籍しています。そして、学内におけるそうした研究者の結集軸として本研究所は機能しています。しかし、現在の研究所予算でこうした学内研究資源を十分に活用した研究活動などできようはずありません。

非力のため所長として多くのことはできませんが、ぜひこの改善は実現して行きたいと考えています。これまでに増してのご協力とご支援をお願い申し上げます。所長交代のご挨拶とさせていただきます。

## イデオロギーと創作舞踊伝統 北朝鮮の舞踊家・崔承喜をめぐって

金 採元[キム・チュウォン]氏(お茶の水女子大学学術博士)

2003年4月26日

立教大学太刀川記念館3階多目的ホール

2003年度最初の公開公演・講演会は、このほどお茶の水女子大学で学位を取得された金採元(金恩漢[ウンハン])氏を招き、学位論文「崔承喜研究 - 北朝鮮での舞踊活動(1946~1967)中心に」をもとにお話いただいた。講演ではビデオも一部上映され、また舞踊の基本動作も実際に演じていただいたが、ビデオは金氏が苦労して集め編集されたもので、これまでほとんど紹介されたことのない、崔承喜ないしはその弟子による舞踊を記録した、きわめて貴重なものである。

さて、金氏が本論文の主題とした崔承喜[チェ・スンヒ]は、1926年に来日して現代舞踊家・石井漠のもとで現代舞踊を習得、その舞踊のみごとさと美貌から、日本の舞

踊界や文化人たちから「半島の舞姫・崔承喜[さい・しょうき]」として人気を呼んだ創作舞踊家である。その後日本は敗戦、朝鮮半島の解放をうけて彼女は韓国に渡ろうとするが、植民地宗主国日本での活動が問題となったためか批判を受け、共産党員であった夫とともに1946年に北朝鮮に居を定めて、活発な舞踊活動を展開していった。それは現代舞踊に伝統様式を取り入れ、独自の舞踊に仕立て上げたもので、その後1967年に追放されるまでの20年余、舞踊教育者・創作舞踊家・社会活動家として活躍、後進たちに大きな影響を与えた。

彼女は一時、最高人民会議代議員をも務めたほどであり、金日成・金正日らによる政治イデオロギーにも忠実に沿った創作舞



民族衣装に身を包んだ舞踊家による演技も披露された



金 恩漢 氏

踊活動に専念していたにもかかわらず、1967年に一家軟禁が報道されてからは消息が途絶え、追放あるいは粛清されたとも伝えられていた。しかし、はからずも本年（2003年）2月、30余年を経た今、ようやくにして彼女の名誉が回復され、その死亡日も1969年8月8日と特定された（『朝鮮中央通信』2月9日付）。ただし崔承喜の追放・名誉回復の理由、死亡の原因等については、いずれもまったく明らかにされていない。

「民族舞踊家」と謳われたこの崔承喜に関する関心は、韓国でも日本でも近年急速に高まっているものの、北朝鮮に渡って以降の資料はほとんど入手が不可能であり、研究が進んでいなかったところへ、このたび、お茶の水女子大学の金採元氏は、崔承喜の弟子たちの講演記録や、わずかながら残った崔承喜自身のビデオ資料等の入手に成功し、「北」のイデオロギー下における彼女の舞踊様式の確立過程と展開をつぶさに検証した学位論文をまとめた。ここでは中国を経て採集された資料・文献や映像資料の分析が事細かになされ、また在日朝鮮人へのインタビューなどをも通じて、以下の

ような点が明らかにされた。すなわち、金日成政権下の朝鮮労働党による文化芸術政策と舞踊の基本方針、北朝鮮での舞踊活動における彼女の考案した基礎訓練の内容と、創作された作品の特徴、崔承喜没後の作品の継承と実態、の3点が主なものである。

作品の主題と内容を通して表れる彼女の舞踊思想を通時的にみると、朝鮮解放以前の日本における現代舞踊の活動期にあっては、被支配民族の哀歎、自由へのあこがれ、弱者の挫折と犠牲などがテーマの抵抗精神が主であったが、帰国前後には朝鮮の民俗舞踊を軸とした古典や仏教的な東洋舞踊への傾斜がみられ、さらに朝鮮解放の翌年以降の北朝鮮での活動期には、彼女の深層に根付いていた抵抗精神が、舞踊政策との関わりの中で政治性の高い愛国主義へと転換した。そのうちには、ソ連のバレエ、中国の昆劇の影響下にある芸術上の社会主義的リアリズムの技法による勸善懲悪、朝鮮民族の労働愛と祖国愛の表現が大きな影響を与えていることが明らかである。この点で彼女の活動は、北朝鮮の民族精神にもよく合致したものであったはずであるが、やがて「主体[チュチュエ]思想」が政治理念とされ、体制を強化していく時期に、独創的芸術性を堅持する崔承喜とその活動は国家から追放される結果となってしまった。

以上のように金氏の研究は、単に崔承喜とその舞踊技法といった問題にとどまらず、旧来の「民族伝統」の急進的再編、また「伝統の再創造」と政治的イデオロギーとの関わりなどの問題を、初めて北朝鮮の文脈で検証し、明らかにしている。

（小西正捷 / アジア地域研究所員）

## 黄土の民はいま

池谷 薫 氏(映画監督)

2003年9月27日

立教大学池袋キャンパス 8201 教室

立教大学アジア地域研究所の本年度 2 回目の公開公演・講演会「黄土の民はいま」は、9月27日に立教大学池袋キャンパス 8201 教室で開催した。講師には映画監督・池谷薫氏をお招きして、氏の原点ともいべき中国農村を描いたドキュメンタリー「黄土の民はいま」を上映した。ドキュメンタリーでは、リンゴ農地競売に沸きあがる村と、一人っ子政策下で妊娠した2人目を出産しようと苦勞する夫婦を抱える村、それぞれの人間模様が描かれている。取材活動が困難だといわれる中国での政策秘話や、取材活動で垣間見た中国農民の姿を、池谷監督に語ってもらった

ドキュメンタリーが好きで、それだけをやってきた。今秋公開される映画『延安の娘』の出発点は1994年に放映されたNHKスペシャル『黄土の民はいま』というテレビドキュメンタリーである。

93年の冬に黄土高原の2つの隣接する村を取材した。当時、制作会社「テムジン」に所属していて、その会社の人々が中国に取材に行くとき協力費を出せといわれるなど拝金主義になっているが、あの国はどうなったのだ、あの革命の心はどこにいったのか、と問い、企画を立てた。その企画書を見てもおもしろくなるとは思えなかったが、93年夏に(下調べのための)取材にいくと、ある村で土地の競売の騒動が持ち上がっていて、おもしろい、改革、開放を一つの農村を舞台に裏側から見ていくには、いい題材だと取り組み始めた。

### 嘆きの老紅軍 中国での取材の進め方

実際に番組を見ると、「よく撮れたなあ」と思ってくれる人は多いだろう。取材中は必ず中国側の役人がついて回るが、夏の下見の時は北京の「農民日報」が受け入れ側となり、対応してくれた。その時は5日目ぐらいに「未開放地区だから帰れ」と言われ、泣く泣く帰った。

昔、毛沢東とともに革命に参加した老紅軍を中心に聞き取りを進めていた。そこで競売の話が出たのだが、それ以上は取材できない。そこで、中国は人間関係の国なので関係各省にあた

ってこぎつけることを考え、まず秋に武漢に飛んだ。たまたま親しくしている人に武漢の共産党校(幹部の学校)の校長をされていた方がいた。彼に推薦状を書いてもらい、今度は西安の共産党校の校長に会う。彼に改革開放の今を伝えたい、と話して取材の許可を取り、それで、ようやく延安もOKした。

中国取材で大切なのは、結局は個人(の資質)にかかっている。そのとき同行した役人が宣伝部のチャン・ジャンユーで、彼は真実ならば厳しい話でも撮らせるよ、という大人物だったのだ。「延安の娘」も最初は主人公のハイシャー(海霞)は知恵遅れだからダメだと取材許可が降りなかった。文革の子というためだろう。そこでまた、役人探しから始め、彼に来てもらい、うまくいったのだ。

ところで土地の競売の話はおもしろくなるだろうと予想がついたが、黄土高原を歩き来して



池谷 薫 氏

いると、土地の乱痴気騒ぎで黄土高原は表現できるのかなあ、という思いに駆られた。それぐらい広い大地だった。そこに人間の命をあてたいな、それしかないな、結婚式でもないかな、と探した。一月前のロケハンの時、おもしろいおじさんとの出会いがあり、もう一つの村を捜し当てた。その人は西安から下放された「ハダシの医者」(文革中に医者が足りないので、現場で医者の知識を身につけると促成された、正規の教育を受けていない医者なこと)で、ロバにまたがり村々を巡回していた。彼は一人っ子政策の担当者でもあった。私は3年前に一人っ子政策の抜き打ち検査で中絶させられる様子を撮って、放送後、「私、中国に生まれなくて良かったです」という感想をいただき、俺、そんな番組をつくっちゃったんだと反省していた。個人的には一人っ子政策は重要な政策だと思うが、「それでも生きたい」というのはケースないかな、と思っていた。

その彼にそんな人はいないかという、いと教えてくれた。チャン・ジャンユーという役人も取材を許可してくれた。じつはテレビ(その日上映したビデオのこと)に出ていた、その郷政府の党書記はテレビの闇販売という、汚職をしていた。チャンは彼の上級役人だったので、ケシカランということになった。生きたいという心情は抑えきれない。だからいいよ、と。とにかくあらゆる人間関係を考えながら、作っている。そのことが一つひとつのシーンにつながっていくと分かっていただけありがたい。

### 取材の進め方

僕は、寄り合いや会議は絶対おもしろいと思っている。普通の人あまり撮らないが、こういう人が集まる所にはエッセンスが詰まっている。現場では、何で今みんな笑ったのか分からなくても、後で例えば言い合った人たちは親子だ、と分かり(いろいろ見えてくる。)だから、僕は現場では毎晩、テープを見直して研究している。

番組に出てくる、(農地を競り落として自分

の土地を広げようとしている)李ヤクチュウは、まじめで本当に勉強家。西安から農業誌を取り寄せて研究している。けど目端がきくことで文革中に相当苛められて、少しひねくれた性格になった。一方の韓も、すばらしいキャラクターだ。だが、いつも午前中にいくと、寝ている。この差が30倍もの収入格差になったんだな。

李はすごいけど、アキレス腱はどこにあるのかな、と考えた。彼も人間なんだから、絶対何か弱みがあるはずだと。そして、ふと気づいた。晩飯を取材スタッフと食べることが多くて家に帰らないがどうしてだろう。すると恐妻家だとわかり、夫婦けんかをマイクだけ入れて障子越しに撮った。あの「ぶんなぐってやろうか」というのはカメラも実は入れていたが生々しすぎるというので、障子越しの映像を採用した。我々がしたのは、障子の穴を少し開けたくらいだ。

トップシーンの農民同士のケンカも、やらせだろうと思う人はいるだろう。だが農民にとってカメラが裁判官みたいなものになって、「今、ここで言わなきゃいつ言う?」ぐらいの覚悟で挑んでくるのだ。それは、テレビの事情が分からない人たちということもあるだろう。

もともとは党書記あたりに「土地で揉めているところはありますか」と聞き出して行った。あれは2番目にヒドイ例で、1番目は鎌でざっくり切って入院しているのだそうだ。ほんのちよっとの境界線が農民にとって死活問題なのだろう。

### 10年後に再訪すると

10年後、『延安の娘』のためにあの村を再訪した。老紅軍のおじいさんたちは取材中の1992年の段階では1,300人だったが、その時には十数人になっていた。彼らは、乞食のようなことをやっていた人たちで、12歳ごろまではズボンがなくてオチンチンを出して歩いていたそうだ。しかし、当時の共産党は高邁な理想に燃えていたのだろう。無知無学な人達に教育を施した。彼らは今でも、あの村で一番賢い人たちだ。ちゃんと新聞を読んで、テレビを見て時事的な話



ビデオ「黄土の民はいま」が上映された

を知っている。彼らが命懸けで戦ったので、今の中国ができた。そして今でも俺たちができることは何なのだろうかと考える。大事な生き証人だと思っている。

競売されたリンゴの土地は、きっと李さんの手に渡ってすでに韓さんのものではなくなっているだろうと思ったら、韓さんがあの土地をしっかり守っていた。ただし、韓さんのリンゴはスカスカしていません。李さんののはうまかった。李さんは勉強家で熱心だから、やっぱり差が出るんだな。でも出稼ぎで頑張ったんだなあ。李さんは、子供が嫁をもらい、48歳でおじいちゃんになっていた。

一人っ子政策に逆らい子供を生もうとしていた夫婦には、男の子が生まれた。生ませてやろうと必死だったあのおばあちゃんは、その翌年亡くなっていた。口バで水汲みにいていた子は孤児で、村全体で育てていたのだが、もう嫁がいた。村にはパラボナアンテナが立っていて、テレビを見ていた。10年って早いんですね。

取材中の食事は毎日、粟粥。これは3日目にはうまくなる。体調も良くなる。男の人がいるときは粟だが、女の人だけだとカラカラに干したトウモロコシをお湯で戻しただけの食事となる。味付けは塩を一振り。あれはさすがに喉を通らなかった。でもいい村で、再訪できて嬉しかった。皆さんに報告できたことも嬉しい。

#### 映画「延安の娘」について

ハイシャのこともそうですが、かつての紅衛

兵であった人たちの、いまの生きざまを見てほしい。今、50歳の働き盛りですが、学問をしていないので真先にリストラの対象になっています。どこか心の中で、このまま俺たちは歴史の闇に埋もれてしまうのか、という悔しい思いも持っている。

映画『延安の娘』は、まず北京、延安で試写をした。「おまえの撮ったのはCCTVじゃやらないね。日本人だから撮れた」と言われた。自分が、彼らよりちょっと下の世代なのも良かった。日本にも全共闘世代がいる。彼らは複雑な顔をして帰っていった。高見さんは「君の世代だから撮れたんだねえ」といっていた。

\*

上田：ユーモアというか、不思議なおもしろさがある。出ている人は演じているような、でも真実なのですね。

池谷：下放は厳しいけど彼らの青春でもあった。ひもじい中でいかに羊を盗むか、鳥を盗むかという話になると目が輝く。つらい話だけど、誰それと誰それがくつついたゴシップ話なので、みんな興味があり、ひそひそ話はしていたけど、本人たちを慮って公では言わなかった。ところが娘が会いたいといっている。なんとか会わせてあげたいと、今回の主人公たちは思った。

演じているようなということだが、途中から主人公たちが変わっていった。意識的に自分で自分を演じだした。最初は娘のため、親父のためにと協力のつもりでやっていたのが、もしかしたら探されている親は自分だったかもしれない、とやがて自分の過去と重ね合わせて考えるようになっていく。カメラが入っているせいで、過去との対峙から逃げることもできず、30年前と今が混在しだし、眠れない日が続く。それを吹っ切ってカメラの前に出てくると違ってくる。その裏には存在証明見たいなモノがある。封印していたものを娘がちょっと開け、そこにカメラが入った。最後には彼らの存在がカメラを凌駕していた。なかなか人間てすごいなと思えるような映画になったと思う。(談)

(上田 信 / 立教大学アジア地域研究所研究員)

## 研究所日誌 2003 年度前期

- 04・23 第 61 回アジア研究・学術フロンティア・セミナー「今日の平和研究の課題」+「平和研究；ヨーロッパにおける現状と東アジアにおける課題」: Johan Galtung( TRANSCEND; A Peace and Development Network 代表)
- 04・26 第 1 回総合研究センター委員会
- 04・26 公開公演・講演会「イデオロギーと創作舞踊伝統 北朝鮮の舞踊家・崔承喜をめぐって」金採元(お茶の水女子大)+小西正捷(立教大)
- 04・30 第 1 回学術フロンティア運営委員会
- 04・30 第 1 回所員会議
- 06・26 第 2 回総合研究センター委員会
- 07・02 第 2 回学術フロンティア運営委員会
- 07・02 第 2 回所員会議
- 7・10,15,23 立教大学招聘研究員連続セミナー「環境政策の比較研究<日・米・ヨーロッパ>」: Miranda Schreurs (メリーランド大準教授): 地球温暖化対策, 環境 NGO の今後の課題, 東アジアにおける環境運動と女性の政治エンパワーメント
- 07・24 アジア地域研究所+学術フロンティア館内引越し
- 07・16 第 64 回アジア研究・学術フロンティア・セミナー「日本における多文化教育を考える 教育総研における一年間の研究と議論を踏まえて」宮島喬、佐久間孝正(立教大)+鈴木江里子(フジタ未来経営研究所)
- 07・16, 23, 08・01 立教大学招聘研究員連続セミナー「アジア太平洋の地域アイデンティティと持続可能な開発のための教育」: Mark Lincicome (米国ホーリークロス大準教授): アジア太平洋の地域アイデンティティと持続可能な開発のための教育, 『アジア太平洋地域』を描く 地域アイデンティティとコミュニティの展望, 国際シンポジウム「アジア・太平洋のグローバリズムと持続可能な開発のための教育」セッション3 「『アジア太平洋地域』を描く - 地域アイデンティティとコミュニティの展望」, 同セッション4「グローバルな課題と国を超えた市民意識の形成」
- 07・31 - 08・01 国際シンポジウム「アジア・太平洋のグローバリズムと持続可能な開発のための教育」

..... お知らせ .....

立教大学アジア地域研究所のホームページが生まれ変わりました。当研究所の刊行物、当研究所ならびに他機関の各種イベント案内、寄贈図書の一覧などを随時掲載しています。ぜひ一度ご覧ください。

### *RUCAAS News letter*

#### 立教大学アジア地域研究所ニューズレター No.11

発行日：2004年1月15日

発行所：立教大学アジア地域研究所

Rikkyo University Centre for Asian Area Studies

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1 ミツチエル館

Tel : 03-3985-2581 Fax : 03-3985-0279

e-mail : [ajiken@rikkyo.ac.jp](mailto:ajiken@rikkyo.ac.jp)

<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/ajiken/>